中一国語
竹取物語　第二回

講師：羽場 雅希

◆今日の授業で学ぶこと

・竹取物語

◆　竹取物語

・作者は不明。

・我が国最古の仮名書きの（仮名文字を使った）物語。

・「かぐやひめ」のもとになった話。

今は昔、竹取の翁（おきな）といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。

◆「蓬莱の玉の枝」

かぐや姫（ひめ）に熱心に求婚（こん）した五人の貴公子たちのうち、くらもちの皇子（みこ）は、蓬莱（ほうらい）の玉の枝を探しにいくと言って船出するが、実は、にせの玉の枝を作らせていた。皇子は、翁（おきな）と姫に、架（か）空の冒（ぼう）険談を語る。

（注）蓬莱の玉の枝――根が銀、茎（くき）が金、実が真珠（じゅ）でできていると言われる木の枝。蓬莱（蓬莱山）は、中国の伝説上の理想郷。

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

かぐや姫に熱心に求婚した五人の貴公子のうち、くらもちの皇子(みこ)は、蓬莱(ほうらい)の玉の枝を探しにいくと言って船出するが、実は、にせの玉の枝を作らせていた。皇子は、翁(おきな)と姫に、架空の冒険談を語る。

これや（これこそ）①わが求むる山ならむと思ひて(a)、さすがに（やはり）恐ろしく②おぼえて、山のめぐり（周囲）をさしめぐらして（こぎ回って）、二、三日ばかり、見歩くに、天人のよそほひ(b)（服装）したる女、山の中よりいで来て（山の中から出てきて）、銀の金鋺(まり)（おわん）を持ちて、水をくみ歩く。これを③見て、船より下りて、「この山の名を何とか申す（何というのですか）。」と問ふ(c)。女、答へていはく、「これは蓬莱の山なり。」と④答ふ。これを聞くに、うれしきことかぎりなし（うれしくてたまりませんでした）。

その中に、この取りてまうで来たりしは、いとわろかりしかども、⑤のたまひしに違(たが)はましかばと、この花を⑥折りてまうで来たるなり。

〔後半部分の現代語訳〕

その中で、この取ってまいりましたのは、たいそう見劣りがするものでしたが、（かぐや姫が）おっしゃったものと違っていては（いけないだろう）と思い、この花（の枝）を折ってまいったのです。

（注）蓬莱の玉の枝…根が銀、茎が金、実が真珠でできているといわれる木の枝。蓬莱（蓬莱山）は、中国の伝説上の理想郷。

【第一問】
波線部(a)〜(c)をそれぞれ現代仮名遣(づか)いに直し、すべて平仮名で書きなさい。

(a) おもいて	(b) よそおい
(c) とう	

【第二問】
傍(ぼう)線部①「わが求むる山」とは何のことを指すのか、文中から四字で抜き出して書きなさい。

蓬莱の山

【第三問】

傍線部⑤「のたまひし」、傍線部⑥「折りてまうで来たる」の動作主（主語）はそれぞれ誰か答えなさい。

⑤ かぐや姫
⑥ くらもちの皇子

のたまふ

意味：おっしゃる。

用例：のたまひしに違はましかばと

（おっしゃったものと違っていてはいけないだろうと）